

「おたくはAP大丈夫ですか？」

この秋は、いわゆる豚胸膜肺炎(アクチノバチルス・プルロニューモニアエ(AP)感染症)の発生報告やこれに関連した病性鑑定がとても多かった年です。確かに、秋口、寒暖差が激しいため本病の発生がしやすい時期なので、APワクチンにとっても鬼門になっています。このため、われわれAP125RXやAPMといったAP関連ワクチンを供給するワクチン屋は、夏から秋にかけては、APワクチンの注射時期を再検討したり、追加注射を検討したりと、例年忙しい時期になります。わけでも、今年は普段の年を上回る発生があったようです。その背景を分析してみると、PCV2感染症とPCV2ワクチンの普及が一つの理由になっているようです。

PCV2ワクチンがない状況でPCV2関連疾病が重度に発生している農場では、APワクチンを注射したくても注射できない状態でした。それは、一つには、ウイルスが血中に出てくるような時期に、注射作業を行うことで図1の様にウイルスを農場内に拡散してしまう恐れがありました。また、ワクチンはそれ自体が免疫的な刺激物になりますので、ウイルスが動き出すようなタイミングで注射しますと、リンパ節内に潜むPCV2を急激に動かすこととなります(図2)。実際に、ワクチン注射することで、元気消失、食欲不振といった症状を発現して、以後予後不良で豚の状態が悪くなるとの理由で、APワクチンの注射を断念される養豚家の方は少なくなかったようです。ワクチン屋にとっても、ワクチンを注射して抗体検査を実施してみると、豚の免疫不全が背景にあるとしか思えない事例が多くありました。完璧と思って提案したワクチンプログラムの切れが悪く、すっきりしないことも多々ありました。

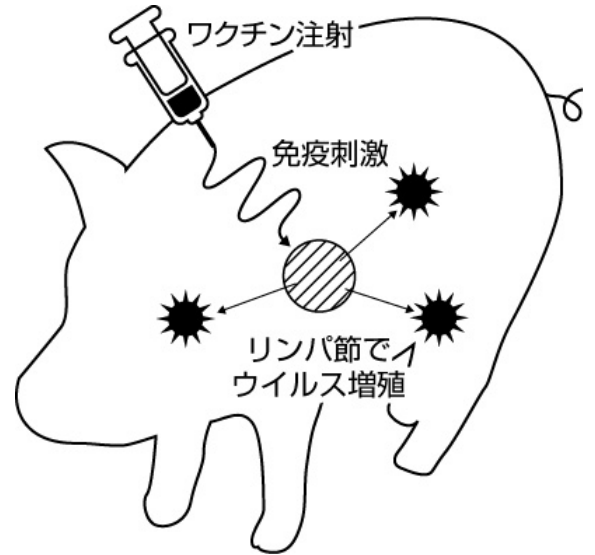


図2 ワクチン注射によるウイルス増殖の促進

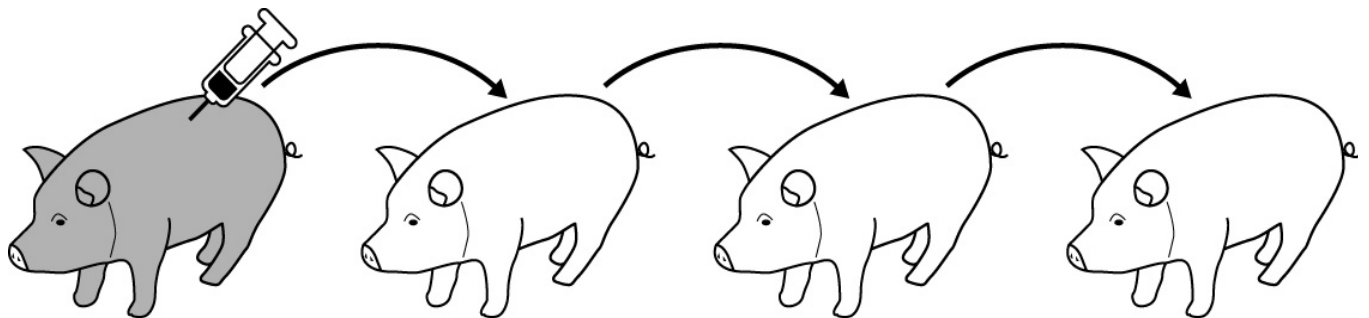


図1 ワクチン注射によるウイルスの伝播

提案したワクチンプログラムの切れが悪く、すっきりしないことも多々ありました。

こうした状況の中、登場したのが一連のPCV2ワクチンです。これらのワクチンは無関係のワクチン屋にとっても有難いワクチンです。今まで、ワクチン注射作業によるウイルスの伝播、ワクチン注射によるPCV2関連疾病の誘発、注射時期における豚の免疫不全といった問題を回避するためPCV2抗体の動きに神経をとがらせながらのワクチンプログラム作成作業が、かなり単純化します。農家の方々にとっても、PRRSVとPCV2とは豚呼吸器複合感染症(PRDC)におけるコントロール困難であった一次病原体の双壁の一つがまさに消え去ろうとしています。全ての呼吸器病の問題がこれで解決したと誤解された方もおられたと思います。ここに大きな落とし穴があったのです。

豚3大呼吸器病(AR、MPS、AP感染症)という今はあまり使われなくなってしまった言葉があります。しかし、これらは歴とした一次病原体が引き起こすそれぞれ独立した疾病です。その中でも、特にAP感染症はPCV2の呪縛から解き放たれて、奪われていた一次病原体の地位を取り戻し、その破壊力をわれわれに再認識させてくれたのが、この秋に起こったAP感染症による事故の実態ではないでしょうか。

しかし、AP感染症に対して、われわれは十分な備えがあります。確かに様々な理由でAPワクチンの注射をしていなかったかもしれませんが、これからしっかり対策すれば良いことです。今、抗体検査をすると90日齢あたりでAP菌体抗体が上昇してくる農場が散見されます(図3)。教科書的なAP感染症好発時期です。はじめの1歩からまた、きちんとやっていけばAP感染症はコントロールできます。また、昔と違うのは、皆さんがPRRS対策、PCV2対策のため一般的な衛生対策を熱心に行われているためだと思われるのですが、抗体検査の上から見ると昔のような高度AP汚染農場と考えられるような農場は、ほとんど見ないようになりました。ですから、今まで蓄積してきたノウハウを元に、ワクチンをしっかり使用していけばAP感染症は怖くありません。

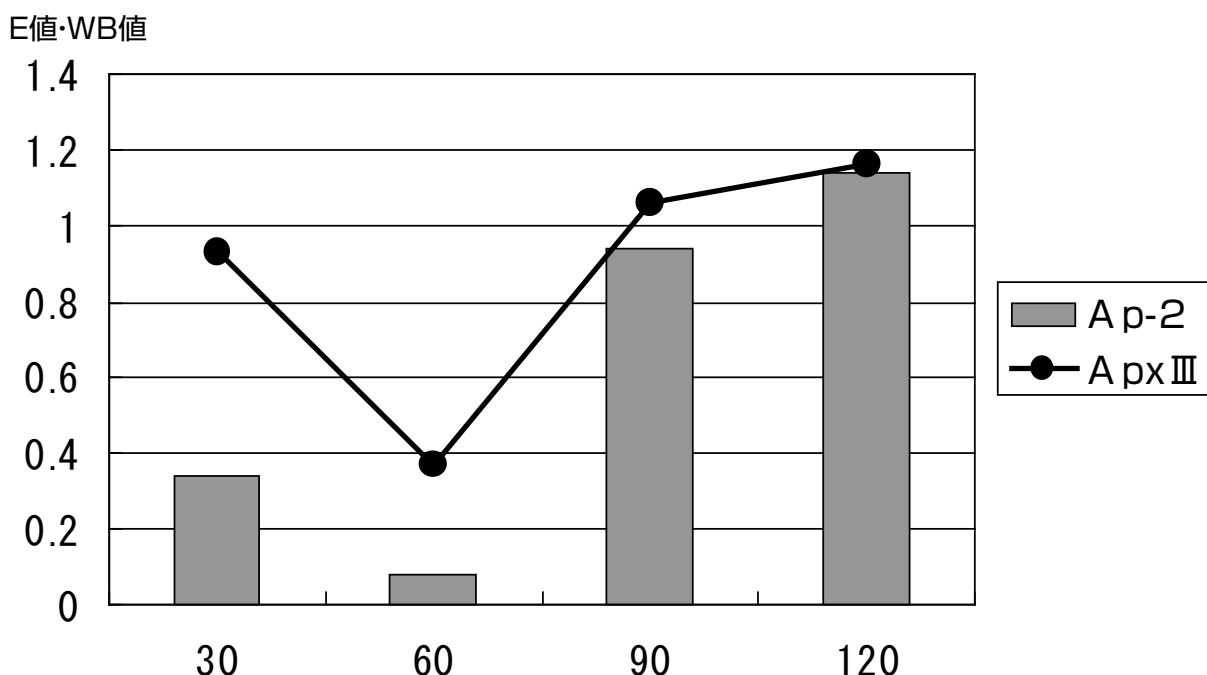


図3 APワクチンを中止していた事例